

# 2019年度春学期「音楽と表現Ⅰ」報告

— 表現へのアプローチを主体とした初年次音楽教育の試み —

A Report of “Music and Expression” (Spring Semester 2019):  
A Practice of Music Education Focused on Approaching to Expression for the First Year Students

葛西 健治<sup>1)</sup>・嶋田 陽子<sup>2)</sup>・齋藤亜都沙<sup>2)</sup>・志田尾恭子<sup>2)</sup>  
KASAI, Kenji・SHIMADA, Yoko・SAITO, Azusa・SHIDAO, Yasuko

キーワード：保育者養成教育、音楽教育、初年次教育、再課程認定

## 0. はじめに

2019年度、こども教育宝仙大学（以下、本学）では、再課程認定を受けて新設された科目「音楽と表現Ⅰ」を新しく開講した。開講時期は1年次春学期であり、当該科目は新生が入学後最初に履修する音楽関連科目である。

本稿ではまず当該科目の概要を整理し、前年度まで同時期（1年次春学期）に開講していた音楽関連科目「音楽演習（基礎）」「声楽（基礎）」とのカリキュラムの比較を行う。その中で新旧カリキュラムの相違点及び改善のねらいを明らかにすると共に、新科目「音楽と表現Ⅰ」の授業実践の報告を行う。更にその教育的効果を検証すべく、学期末に履修生全員を対象に行ったアンケート調査の結果をまとめ、考察を加える。

## 1. 「音楽と表現Ⅰ」概要

「音楽と表現Ⅰ」は、本学の最新カリキュラム（以下、新カリ）における音楽教育の基礎に位置付けられる科目である。以下、表1に新カリの音楽関連科目一覧を示す。

表1 本学の最新カリにおける音楽関連科目一覧

	1年	2年	3年	4年
春	音楽と表現Ⅰ	音楽実技Ⅱ	歌遊び	
秋	音楽実技Ⅰ	音楽と表現Ⅱ	音楽遊び	
			リトミック	

「歌遊び」「リトミック」の2科目は3・4年次のいずれか1回のみ履修可能。

1年次春学期の音楽関連科目は、新カリでは「音楽と表現Ⅰ」の1科目のみであるが、旧カリキュラム（以下、旧カリ）では「音楽演習（基礎）」「声楽（基礎）」の2科目が同時に開講されていた<sup>1)</sup>。これら新旧3科目の科目区分と単位数を以下、表2に整理する。

新カリ「音楽と表現Ⅰ」の科目区分は「大学が独自に設定する科目（以下、独自科目）」であるが、そこには旧カリ2科目における「教科に関する科目（音楽）」と「保育表現技術」の性格が引き継がれている。単位数は旧カリの合計2単位に対して新カリでは半減の1単位となっているが、新カリ「音楽と表現Ⅰ」は免許・資格の取得に関わる必修科目として、位置付けの重要性は維持されている。

なお2年次秋学期「音楽と表現Ⅱ」の設定は科目区分、単位数共に「音楽と表現Ⅰ」と同様であるが、1年次秋学期「音楽実技Ⅰ」及び2年次春学期「音楽実技Ⅱ」はいずれも1単位、「卒業選択」という科目設定になっている。

また本学の最新カリでは、音楽関連科目とは別に「表現」をキーワードとした「大学が独自に設定する科目」が2つ設定されており（1年次春学期「身体と表現」及び2年次春学期「造形と表現」）、これら4つの科目をもって「表現シリーズ」のカテゴリーを形成している<sup>2)</sup>。

## 2. 2019年度春学期「音楽と表現Ⅰ」授業報告

本項では旧カリ1年次春学期開講の2科目（「音楽演習（基礎）」「声楽（基礎）」）との比較を適宜交えながら、2019年度春学期「音楽と表現Ⅰ」の授業実践について報告を行う。

1) こども教育宝仙大学・准教授

2) こども教育宝仙大学・非常勤講師

表2 科目区分と単位数一覧

科目名	新	旧	
	音楽と表現 I	音楽演習 (基礎)	声楽 (基礎)
科目区分	(幼) 大学が独自に設定する科目 (保) 保育内容の理解と方法	(幼) 教科に関する科目 (音楽) (保) 保育表現技術	(幼) 教科に関する科目 (音楽) (保) ※設定なし
単位数	1 (必修)	1 (必修)	1 (必修)

(幼) : 幼稚園教諭一種免許状の取得に関する科目区分 (保) : 保育士資格の取得に関する科目区分

## 2.1. 授業概要と到達目標

「音楽と表現 I」の授業概要と到達目標をシラバス(2019)から引用する。

### (概要)

子どもの歌を主たる教材とし、講義と演習を適宜組み合わせながら授業を展開する。また五感を通じた感性の涵養を目指して、鑑賞の機会を設ける。

### (到達目標)

本授業は、保育者として必要とされる子どもの表現に対する理解とその援助に向け、学生自身が生活や身の周りの環境のなかにある現象や情報にはたらかかけていく身体感覚と、さまざまなもの的美しさを認識する感性を養っていくものである。またそれとともに、感じたことや考えたこと、想起されたイメージなどを自分なりに表現でき、他者とのコミュニケーションの方法を身につけ、自身の創造性を豊かなものにしていくことをねらいとしている。

「音楽と表現 I」では、一人ひとりの身体から発せられる声の表現、また同様に身体との有機的連関に裏付けられる鍵盤楽器の表現の基礎について理解を深め、その素晴らしさを実感を持って味わうことを目標とする。

概要に明記された「講義と演習の組み合わせ」及び「鑑賞の導入」の2点は、旧カリにはなかった新たな取り組みである。

到達目標の第1パラグラフは前述の「表現シリーズ」4科目で文言を共有し、カテゴリー全体の統一を図っている。「音楽と表現 I」では「身体」「声」「鍵盤楽器」の3点をキーワードとし、それらの表現の基礎に関する理解と、その素晴らしさを学生自身が実感を持って味わうことを目標としている。

## 2.2. 授業の内容と運営に関する事項

授業の内容(概要)を以下、表3に示す。

全体の特徴としては、内容を4つの単元(「音楽と身体・声の表現」「鍵盤楽器の表現」「鑑賞と振り返り」「子どもの歌を味わう」)に整理した点にある(それぞれの授業実践の詳細については後述する)。「楽典(読譜の指

表3 2019年度春学期「音楽と表現 I」授業の内容(概要)

回	授業内容(概要)
1	ガイダンス
2~4	音楽と身体・声の表現①②③
5~7	鍵盤楽器の表現①②③
8~9	鑑賞と振り返り
10~14	子どもの歌を味わう①②③④⑤
15	期末試験とまとめ

導)」については「音楽と表現 I」では敢えて単元化せず、各授業の講義の際に適宜取り上げるにとどめた。

旧カリ2科目では、いずれも音楽の技術的な指導を中心に行っていたのに対し、新カリでは音楽の「表現」に対する様々なアプローチそのものに主眼を置くことを念頭に授業設計を行った。また、授業概要には「子どもの歌を主たる教材とすること」を明記したが、「音楽と表現 I」はあくまでも「独自科目」として、領域「表現」に関する科目(本学の新カリ科目名は「保育内容(表現)」)とは異なる角度から授業が展開されるよう内容の検討に腐心した。

授業形態については旧カリ「音楽演習(基礎)」をほぼそのまま踏襲し、1学年を3つの「班」(ABC、各30名程度)に分け、更にそれぞれを4分割して「クラス」(6~10名程度)を編成した。各クラスに1名ずつ、計4名の教員を配置し、班毎に延べ3コマ開講するという形も旧カリ「音楽演習(基礎)」と同様である。

ただし、旧カリ「音楽演習(基礎)」ではクラス単位によるピアノレッスン室<sup>3</sup>での授業(ピアノ実技の個別指導)が中心であったのに対し、前述の通り、新カリ「音楽と表現 I」では「講義と演習の組み合わせ」を企図し、特に学期前半の授業では班単位による音楽演習室<sup>4</sup>での活動を多く実施した。

教員の配置については、授業内容に鑑みた専門性の観点から以下、表4の通り変更を行った(教員数は変更なし)。

表4 新旧科目における担当教員一覧

旧カリ「音楽演習（基礎）」	新カリ「音楽と表現Ⅰ」
A：専任、声楽、男性	A：専任、声楽、男性
B：非常勤、ピアノ、女性	B：非常勤、声楽、女性
C：非常勤、ピアノ、女性	C：非常勤、ピアノ、女性
D：非常勤、ピアノ、女性	D：非常勤、ピアノ、女性

(網掛けが変更箇所)

4つの単元のうち、特に「音楽と身体・声の表現」に係る発声法に関しては、成人男女の持つ声域の違いによって、その習得に少なからず差異が生じる場合がある。新カリでは声楽を専門とする女性教員を1名配置することで、男女両性の面から発声法を専門的に指導する体制を整えた<sup>5</sup>。また結果的に、全体としても声楽、ピアノ（鍵盤楽器）を専門とする教員がそれぞれ2名ずつとなり、配置のバランスが整理された。

副教材としては新たに「音楽ファイル」「音楽カルテ」の2点を導入した。

「音楽ファイル」は、授業内で配布された資料等を学生自身が時系列で整理するためのファイルである。当該授業では2穴用ファイル（A4版、100枚まで収容可）を1人1部ずつ、初回授業で配布した。

「音楽カルテ」は、旧カリで使用していた「レッスンカルテ」<sup>6</sup>の大幅な修正版として新カリから採用したオリジナルの学習シートである（図1）。

旧カリ「レッスンカルテ」では、課題曲1曲につき教員の捺印欄が1か所しかなかったため、原則としてそれぞれの課題曲を「両手弾き歌い」ができるまで捺印（合格の承認）を与えることができなかった。対して新カリ「音楽カルテ」では、捺印欄を課題曲1曲につき4か所（「左手」「両手」の欄は使用楽譜の種類により更に3つに細分化）設けたことで、ピアノの初学者であっても具に合格の承認を与えることが可能となった。この改訂のねらいは、学生の達成感の獲得と学習に対するモチベーションの維持、またスモールステップによる子どもの歌のレパートリーの着実な習得を促すことにある。

課題曲（子どもの歌）は2年次春学期まで学期毎に10曲ずつ（延べ30曲）設定しているが、これは学期内での「両手による弾き歌い」の合格を課すものではなく、あくまでもそれぞれの課題曲に触れ、その歌を知ること（最低限「歌」は全て合格すること）を努力目標として学生に示したものである。

### 2.3. 各単元の授業実践

本項では授業実践の詳細について、4つの単元毎に整理して記述する。なおそれぞれの所見については、次項のアンケート分析の中で適宜述べることとする。

### 2.3.1. 音楽と身体・声の表現

旧カリ「声楽（基礎）」では基礎的な発声技術の習得と子どもの歌のレパートリーの獲得を目指し、授業の冒頭にストレッチと呼吸法の練習、発声練習をし、その後子どもの歌を2曲程度じっくり歌唱する、という一連の流れを毎回のルーティンとして行っていた。この方法は1学年全体（履修生約100名）を教員一人で一度に指導するという環境ではやむを得ないことであった。

それに対して新カリ「音楽と表現Ⅰ」は前述の通り、声楽を専門とする教員が2名（男女1名ずつ）配置され、なおかつ班単位（履修生約30名）による演習授業となったことで、より細やかな指導を実現する環境が整った。

全3回の授業の流れを以下、表5に示す。

表5 「音楽と身体・声の表現」授業の流れ

回	内容	形態
①	講義：声って何だろう？ 実技：発声の仕組み、呼吸法、発声法 (まとめと小レポート作成)	全体 全体
②	講義：歌ってなんだろう？（《チューリップ》を題材に） 実技：歌詞の朗読と歌唱（《どんぐりころころ》を題材に） 発表：各クラスによる朗読と歌唱 (まとめと小レポート作成) ※宿題：「プレゼンシート」作成	全体 クラス 全体
③	小テスト：課題曲1曲の朗読と歌唱（教員による伴奏付） (まとめと小レポート作成)	個人

授業回数の①～③は、「音楽と表現Ⅰ」全体の第2～4回に相当する。

「全体」は約30名の班による、音楽演習室での授業を指す。  
 「クラス」は班を4分割した約8名の編成による、ピアノレッスン室での授業を指す。

この単元では、実践的な子どもの歌の学びに先立って、人間にとっての「歌うこと（歌唱表現）」の意義、またその前提にある「声」そのものに対する考察を深めることをねらいとして、授業の流れを設計した。

初回①は学生同士の人間関係の形成も企図し、全体ワークに終始した。パワーポイントによる講義の後、教科書の図を用いて発声の仕組みを解説し、その後レクリエーションを織り交ぜた実践的な呼吸法、発声法の指導、練習を班全体で行った。

②では子どもの歌を題材として詩と音楽、2つの観点からじっくりと作品に向き合うこと、特に詩の情景をしっかりとイメージした上で歌唱表現に取り組むことの大切さについて講義した。そのため実技では歌唱だけでなく、詩の朗読を課題に含め、朗読と歌唱の2本立てでクラスワークを行った。最後は班全体で発表を行い、クラスワークの成果を互いに振り返る機会を設けた。

宿題の「プレゼンシート」は③の小テストへの接続を企図した課題で、②で題材にした子どもの歌2曲（チューリップ、どんぐりころころ）のうち任意の1曲について、

♪音楽カルテ♪

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

担当教員						
1春	1秋	2春	2秋	3・4春	3秋	3・4秋
音楽と表現Ⅰ	音楽実技Ⅰ	音楽実技Ⅱ	音楽と表現Ⅱ	歌遊び	音楽遊び	リトミック

番号	曲名	課題提示	歌	右手	左手	両手	調	備考(試験選曲等)
1	大きなくりの木の下で	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
2	おかえりのうた	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
3	おべんとう	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
4	思い出のアルバム	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
5	さんぼ	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
6	ぞうさん	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
7	チューリップ	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
8	どんぐりころころ	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
9	とんぼのめがね	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
10	むすんでひらいて	1春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
11	あわてんぼうのサンタクロース	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
12	うみ	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
13	うれしいひな祭り	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
14	大きな古時計	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
15	お正月	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
16	おもちゃのチャチャチャ	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
17	たなばたさま	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
18	とけいのうた	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
19	はをみがきましょう	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
20	まっかな秋	1秋			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
21	朝のうた	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
22	あめふり くまのこ	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
23	犬のおまわりさん	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
24	おかあさん	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
25	おばけなんてないさ	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
26	こぶためきつねこ	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
27	幸せなら手をたたこう	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
28	シャボン玉	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
29	手をたたきましょう	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		
30	山の音楽家	2春			□簡 □コ □教	□簡 □コ □教		

- ・(課題提示欄)「1春」…1年次春学期の意。以下同。
- ・課題曲の捺印条件(合格認定基準)…「歌」:1番を暗譜歌唱/「右手」:歌唱旋律(右手)の弾き歌い/「左手」:伴奏部(左手)の弾き歌い/「両手」:両手による弾き歌い
- ・使用楽譜の略記(左手、両手欄)…「簡」:簡易楽譜(簡易版編曲)/「コ」:コード伴奏譜/「教」:教科書(『こどものうた200』『続こどものうた200』)もしくは各曲のオリジナル(原典)版
- ・裏面には同様のフォーマットで習得推薦曲を更に20曲加えているが、本稿では触れる必要がないため提示を割愛する。

図1 「音楽カルテ」

「絵（詩の情景のイメージ）」と「ねらい（朗読と歌唱の中で、何をどのように表現したいか）」及び「詩の書写」を課したものである。学生はこの「プレゼンシート」で選択した曲を小テストの試験曲とし、教員は試験日当日に提出させた「プレゼンシート」を参照しながら演奏の採点を行った。

なおこの単元については声楽を専門とする教員2名が主担当を務め、それぞれに全体ワークの講義と実技を分担した。クラスワークについては事前に指導方針のコンセンサスを図り、鍵盤楽器（ピアノ）を専門とする教員2名を含め、4名の教員がそれぞれのクラスの指導に当たった。

### 2.3.2. 鍵盤楽器の表現

「鍵盤楽器の表現」は第一義的には旧カリ「音楽演習（基礎）」の内容を引き継ぐものであるが、旧カリ「音楽演習（基礎）」では『バイエル』等のピアノ教本を主教材として専らピアノ（独奏）の実技指導を行っていたのに対し、新カリではいわゆる伝統的なピアノ教本を使用教材から完全に外し、全く違った角度から鍵盤楽器（ピアノ）の表現（力やその幅、保育の場における意義）について教授すべく、授業の内容を一新した。

全3回の授業の流れを以下、表6に示す。

表6 「鍵盤楽器の表現」授業の流れ

回	内容	形態
①	講義：ピアノってどんな楽器？ 座り方と姿勢、手の形 ピアノの表現力（クラスター奏法1） 模範演奏（連弾、《動物の謝肉祭》より抜粋） （まとめと小レポート作成）	全体
②	講義：ピアノの音で動物を表現してみよう クラスター奏法2、リズムパターン （プレワークシート作成） 実技：動物のイメージに相応しい音の表現を探そう ※宿題：「プレゼンシート」作成	全体 クラス
③	小テスト：ピアノで動物を表現する（任意の2種） （まとめと小レポート作成）	個人 （クラス内）

授業回数の①～③は、「音楽と表現Ⅰ」全体の第5～7回に相当する。

この単元の主担当は、鍵盤楽器（ピアノ）を専門とする教員2名が務めた。

授業内容の設定に当たっては、原則として楽譜を使用しない（読譜力を問わない）こと、また何らかの既存曲を取り上げてその演奏技術の習得を目指すことはしないことの2点を前提とした。

初回①は前の単元（音楽と身体・声の表現）と同様に1コマ全てを全体ワークとした。ピアノの構造（音の出る仕組み、ハンマー、弦、響板等）について、パワーポイントを用いて詳しく説明したほか、演奏する際のイスの座り方や姿勢、手の形について、教員が手本を示しな

がら丁寧に解説を行った。その上で、狭義の演奏技術に縛られないピアノの表現力を示す例として図形楽譜によるクラスター奏法を取り上げ、教員が実演した。これは特にピアノ初心者の学習意欲を高めることをねらいとして取り上げたものである。最後に②以降の課題を見越して、《動物の謝肉祭》（サン＝サーンス）から「カンガルー」「白鳥」の2曲を教員が連弾で演奏し、ピアノの表現力の豊かさを具体的に示した。

②ではまず、クラスター奏法をベースとして、音の強弱や高低、長短、テンポ等の変化、またいくつかのリズムパターンを用いることによって、ピアノ1台で様々なイメージが表現できることを全体に講義した。その後各自で2種、好きな動物を選択してもらい、特にその動作的な特徴を分析した上で、その動物をピアノ（の音）で表現することを課題として、クラスワークによる実技指導を行った。また、分析の内容と音による表現のプランを「プレワークシート」に記述させ、その内容を整理し、イメージの絵を加えて清書したものを「プレゼンシート」として提出することを次回までの宿題とした。

「プレゼンシート」は前の単元と同様に、小テスト③の採点の際に教員が参照した。前の単元では学生の緊張を考慮して個別に小テストを行い、試験室（ピアノレッスン室）には採点者（教員）以外入室させなかったが、今回の小テストではクラス毎（8名程度）に試験室（音楽演習室）に入室させ、試験の様子を学生相互に見学させることとした。これは自分とは異なった他者の表現を受け止め、認容する機会として企図したものである。そのため正式な試験ではあるが、各自の発表の後に互いに拍手を送ることを勧奨した。

### 2.3.3. 鑑賞と振り返り

ここまでの延べ6週（第2～7回）に渡る授業は、主として「自ら表現すること」をテーマとしていた。続く2週（第8～9回）はその観点を変え、「他者の表現を受けとめる（受容する、理解する、認容すること）」をテーマに、鑑賞（教員コンサート）と振り返り（グループディスカッション）の授業を行った。

鑑賞（教員コンサート）のプログラムは以下、表7の通りである。

演奏時間は60分間とし、その前後で出席確認や課題（鑑賞レポート<sup>7)</sup>の配布、説明等を行った<sup>8)</sup>。会場は可動イスのある大教室（421教室）を使用し、1年生全員（ABC班合同）を一堂に集めて1コマの授業とした。

演奏は授業担当の4名の教員で行った。これには、教員が学生たちの前で表現者としての振る舞い（演奏）を体現することによって、先立つ授業の中で指導した事柄に説得力を持たせようというねらいがあった<sup>9)</sup>。

表7 鑑賞(教員コンサート)のプログラム(曲目構成)

曲目	編成
ロマンチストの豚(やなせたかし/木下牧子)	二重唱
きらきら星変奏曲(モーツァルト)	ピアノ独奏
黒鍵のエチュード(ショパン)	
こたりのうた(与田準一/芥川也寸志)	ソプラノ独唱
やぎさんゆうびん(まど・みちお/團伊久磨)	テノール独唱
いぬのおまわりさん(佐藤義美/大中恩)	二重唱
マラゲーニャ(レクオーナ)	ピアノ独奏
ムジカ リチェルカータ2(リゲティ)	
リベルタンゴ(ピアソラ/嶋田陽子(編曲))	
喜歌劇《こうもり》より「侯爵様、あなたのようなお方は」 (ヨハン・シュトラウス2世)	ソプラノ独唱
献呈(リュッケルト/シューマン)	テノール独唱
からたちの花(北原白秋/山田耕筰)	ソプラノ独唱
くちなし(高野喜久雄/高田三郎)	テノール独唱
ハンガリー舞曲 第5番(ブラームス)	4手連弾
歌劇《椿姫》より「乾杯の歌」(ヴェルディ)※アンコール	二重唱(4手連弾)

ソロの選曲は各教員に委ね、演奏順はピアノと歌が交互に演奏されるよう設定した。子どもの歌については、それぞれの作品に込められた音楽的なメッセージや表現を十分に引き出せるよう、原典に基づいた信頼のおける楽譜<sup>10</sup>を用いて演奏を行った。また今後の授業の展開を踏まえて、アンサンブル(連弾、二重唱)も取り上げた。

この鑑賞の機会が単なる受動的な楽しみにとどまることのないよう、直後の第9回の授業では鑑賞レポートに基づく個人発表、グループディスカッション(各クラス)、グループディスカッションのまとめの発表(班合同)等を織り交ぜながら、丁寧に振り返りを行った。

### 2.3.4. 子どもの歌を味わう(期末試験を含む)

最後の単元となる「子どもの歌を味わう」では、先に挙げた「音楽カルテ」(図1)の課題と指導方針に基づき、子どもの歌(弾き歌い)の実技指導を行った。

授業の流れを以下、表8に示す。

表8 「子どもの歌を味わう」授業の流れ

回	内容	形態
①	講義：読譜の基礎 課題曲のポイント指導： チューリップ、どんぐりころころ、大きなくりの木の下で	全体 全体
	実技：課題曲に取り組む	個人
②	課題曲のポイント指導： むすんでひらいて、とんぼのめがね、ぞうさん	全体
	実技：課題曲に取り組む	個人
③	課題曲のポイント指導：おかえりのうた、おべんとう	全体
	実技：課題曲に取り組む	個人
④	実技：課題曲に取り組む	個人
⑤	実技：課題曲に取り組む	個人
⑥	期末試験	個人
	春学期のまとめ、期末アンケート 課題曲(夏休みの宿題)のポイント指導： さんぽ、思い出のアルバム	全体 全体

・授業回数の①～⑥は、「音楽と表現Ⅰ」全体の第10～15回に相当する

①では子どもの歌の弾き歌い指導の前提として、最小

限の楽典の知識(音部記号と音名(ドレミ))及びピアノの運指(指番号)について、全体で短い講義を行った。

①②③の3回に共通する「課題曲のポイント指導」では、それぞれの回の課題曲について歌唱と弾き歌いの観点から全体指導を行った。歌唱に関しては歌詞の朗読や内容の解説、また発声上のポイントや表現に関するアドバイスをを行い、弾き歌いに関しては主にピアノ奏法の観点から運指の指導、また強弱やアーティキュレーション等の表現に関する指導を行った。更に、学生がそれぞれの歌の良さを実感し、主体的に味わうことを目指して、教員の模範唱や模範奏のリードのもと、毎回班全体で課題曲を斉唱した。

全体指導を行った背景には、個人指導を前に、教員間で指導方針を共有するというねらいもあった<sup>11</sup>。

なお当初は期末試験までに課題曲10曲全ての全体指導を終える予定であったが、ピアノ初学者<sup>12</sup>を中心に個人指導の時間をより多く確保する必要が生じたため、そのうちの2曲は夏休みの宿題として期末試験後に全体指導を行い、秋学期(音楽実技Ⅰ)に指導を引き継ぐこととした。

期末試験では、課題曲10曲の中から任意の2曲を、それぞれ任意の演奏形態(アカペラ歌唱、右手と歌、左手と歌、両手で弾き歌いのいずれか)で発表することを課題とした。最も難易度の低い「アカペラ歌唱」での受験も是としたが、学生のモチベーションアップを図り、選択した演奏形態の難易度に応じて適宜加点を行うこととし、学生にもその旨周知をした。このねらいは奏功し、期末試験で「アカペラ歌唱」を選択したのは履修生92名中1名のみであった。なお試験場の設定は「音楽と身体・声の表現」の小テスト(第4回)と同様とし、受験者は採点者のいる教室に個別に入室し、演奏を行った。

### 2.4. まとめ

「音楽と表現Ⅰ」は、本学の新カリキュラムにおける音楽教育の第一歩として、言わば学生個々の学びの「畑を耕す」ことを目指して授業を展開した。そのため、特に第9回(鑑賞の振り返り)までは技術的な指導は最小限にとどめ、様々なアプローチから音楽を表現し楽しんでもらうこと、またその表現の奥深さを実感してもらうことに重きを置いた。第10回(弾き歌い①)以降、期末試験を目指して指導を始めた子どもの歌の弾き歌いに関しては、入学前のピアノ学習経験が、取り組みのモチベーションに大きく影響してしまわないよう、学生個々のレベルや進度、また選曲の好みにも応えられるような体制を整えた。その成果の一端は、期末試験の欠席者が一人もいなかったという事実にも現れているように思われる。

また『バイエル』を始めとした既存のピアノ教本による技術指導から脱却したことで、旧カリの大きな課題の一つであった「ピアノ（独奏）技術の習得が目的化してしまう」という本末転倒な状況は回避できた。しかし一方では、初学者に対してピアノ演奏技術の基礎的な指導をほとんど行わなかったことが、今後より実践的な（両手による）弾き歌いのレパートリーを獲得していく上で支障となる可能性も考えられる。

### 3. アンケート調査

「音楽と表現 I」の教育的効果を分析するため、履修生全員（92名）に対してアンケート調査を行った。

授業最終回（第15回）の期末試験（実技）終了後（2019年7月26日、2・3・4限）にアンケート用紙（無記名）を配布し、10分間の記入時間を設けた後、その場で回収した。なお倫理的配慮として、本調査のデータは研究目的以外には使用しないこと、また個人が特定されないように配慮し、回答の内容は一切成績に影響しないことを口頭で周知した。

有効回答数は92、有効回答率は100%であった。

#### 3.1. 結果と考察

設問1～5では、5つの授業内容（声・鍵盤楽器・弾き歌い・鑑賞・読譜）のそれぞれについて、15回の授業を受ける「前」と「後」を比較し、自らの「意欲・関心」「感性」「知識・技能」がどのように変化したかを、0・1・2・3・4点の中から選択して自己評価することを求めた。設問6では、それぞれの授業内容への取り組みを通して、印象に残ったことや学んだことについて自由記述を求めた。

なお本文中に自由記述を引用する際は、明らかに誤記と思われる箇所については適宜修正し、その他については記述された内容をそのまま表記した。

#### 設問1 声の表現（歌うこと）

設問1の自己評価の平均は以下、図2の通りである。

3つの項目はいずれも「後」に上昇しており、特に「感性」と「知識・技能」はいずれも1.00以上の上昇ポイントをマークしている。「意欲・関心」は「前」で最も高い値（2.91）を示しているが、「後」でも3.65と満点に近い値に迫っている。

自由記述を見ると、「歌う事は元々好きだったけどもっと歌うことが楽しくなって好きになった」「元々歌うことは好きだったのでより強く歌いたいという気持ちになりました」等、従前の意欲が更に向上したことを示す回答があった他、「授業のはじめは歌うのが嫌のほうが大

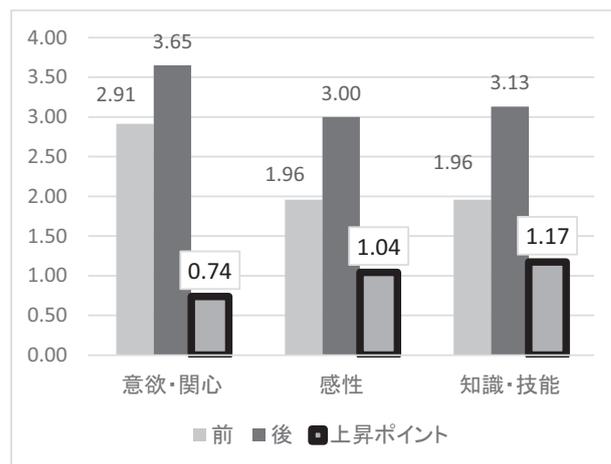


図2 「声の表現（歌うこと）」に関する自己評価（単位：点）

「上昇ポイント」は「後」の値から「前」の値を引いたもの。以下、図3～6、8～11も同様である。

きかったけどその嫌が少しずつなくなってきました」「私は声が下手（筆者注；「声が良くない」の意と思われる）」という意識があり声がキライでした。ですが、この授業を通して声が好きになりました」「歌うことがあまり好きではなかったけれど、詩の朗読などを通して楽しめるようになり、少し好きになった」というように、マイナスだった意欲が授業を通してプラスに転じたことを示す回答があった。

「知識・技能」に係る事柄については「歌うことの基礎から学ぶことで、おなかから出すことを意識できた」「姿勢や息の吸い方などがどれだけ歌に影響するのかを知れた」「声の出し方や呼吸によって音の出る音量がちがう」等、呼吸法や発声法の授業の中で、自身の変化や成長を実感しながら学びに取り組んでいたことが窺える記述が見られた。

また「授業を受ける前は、ただ詩を読んで歌うだけだったけど、だんだん曲の情景をイメージして歌えるようになりました」「場面や状況を想像することで歌い方が変わって良いものになることを知った」「情景を思い浮かべながら歌うことで表現力が増すなどのことを学べた」「イメージして歌うのが面白かった」等の記述には、この単元で特に強調した「声で表現をする際にイメージをしっかりと持つことの大切さ」について、そのねらいを十分に理解した学生が多くいたことが示されている。

今後の課題として散見されたのは、「高い声の出し方が分からない」というような高音の発声法に関する記述である。「高い声の出し方も知ることができた」「高い声のでづらかったけど、練習していくうちに出るようになった」等、授業を通して改善されたとの記述も見られたが、それでも一定数、高音の発声に悩みを抱える学生が存在することに今後も留意する必要がある。

## 設問2 鍵盤楽器の表現 (ピアノを弾くこと)

設問2の自己評価の平均は以下、図3の通りである。

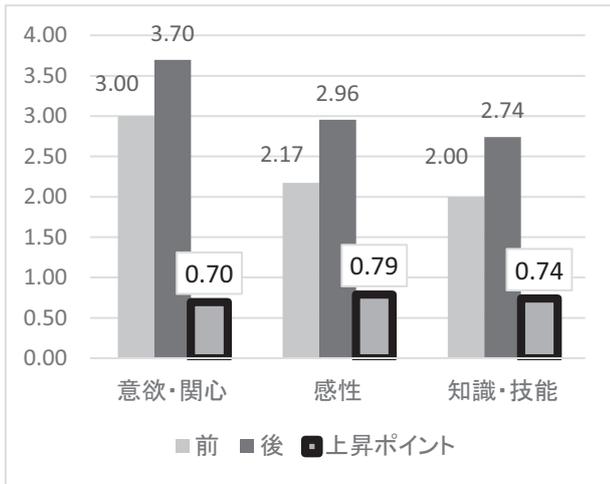


図3 「鍵盤楽器の表現 (ピアノを弾くこと)」に関する自己評価 (単位: 点)

設問1と同様に、全ての項目で「後」の値が上昇している。「意欲・関心」が「前」からすでに高く、「後」では満点近くまで上昇しているという点も設問1に類似している。上昇ポイントでは「感性」が0.79と最も高いが、上昇倍率(「後」の値に対する「前」の値の上昇の割合)を算出すると「感性」が1.36倍、「知識・技能」が1.37倍となり、その差は僅かである。

自由記述では「意欲・関心」の向上に大きく寄与した事柄として、主に2点挙げられていた。

1点目は「教員(指導法)への好感」である。「はじめは全く弾けなかったけど、先生のアドバイスのおかげで少しずつ弾けるようになった」「指番号が全くわからなかったのですが、先生方がていねいに教えてくださったので理解することが出来ました」等、初学者が安心感を持って学びに臨めたことが窺える記述の他、「先生が1人1人丁寧に教えて下さり、よりピアノが弾けるようになりました」等、ピアノ経験者も自身の技術の向上を実感し、更に意欲が高まったとする記述も見られた。

2点目は「レパートリー(子どもの歌)の獲得」である。「ピアノは全くやったことがなくどうせ弾けないからいやだと思っていましたが、曲が一曲でも弾けるようになるのととても嬉しくて楽しいと思えるようになりました」「初心者で正直下の位置もわからなかった自分が一つの曲を弾けるようになったことがうれしかった。両手もはやく弾けるようになりたい」等の記述には、レパートリー獲得の喜びが学習意欲の向上につながった様子が窺える。子どもの歌の習得に関しては設問3と重複するところもあるが、鍵盤楽器(ピアノ)の学びの延長線上

に子どもの歌の学習を位置付けているという点では、学生の記述内容は授業全体のねらいと合致している。

一方、演奏技術の習得に先立つ表現へのアプローチとして、この単元で試みたユニークな取り組みについては、初学者よりも経験者の方がより深く印象に残ったようである。「もともとピアノをやっていた時はソロで楽譜通り淡々と弾いていたが、曲を作ったり(筆者注:「クラスター奏法による動物の表現」のことと思われる)と今までやったことのないことをピアノですることができてピアノへの意欲がさらに出た」「ただピアノを弾くのではなく、自分の中でこの曲はこういうところで弾かれているのかということや、感情を込めて弾く事によって強弱をつけやすくなりました」「指で弾くだけではなく、腕などを使って演奏も出来ることを初めて知りました」「ピアノを弾く時に気持ちを入れて、体で表現するイメージでひく」等の記述に、そのことが窺える。

前述の通り、この単元では演奏に関する技術的な指導は最小限にとどめていたが、それでも自由記述欄には自身がピアノを弾く際に感じる技術的な課題についていくつか記されていた。そのうち目立ったのは「リズムの取り方」「リズムが難しい。手が思うように動かなかった」「リズムの取り方が分からないものもあったけど、手拍子で確認したりできて分かりやすかった」等、リズムの習得に関する事柄であった。今後は授業全体を通じて、リズムに関する指導をより多く、丁寧に取り上げる必要があると思われる。

## 設問3 弾き歌い

設問3の自己評価の平均は以下、図4の通りである。

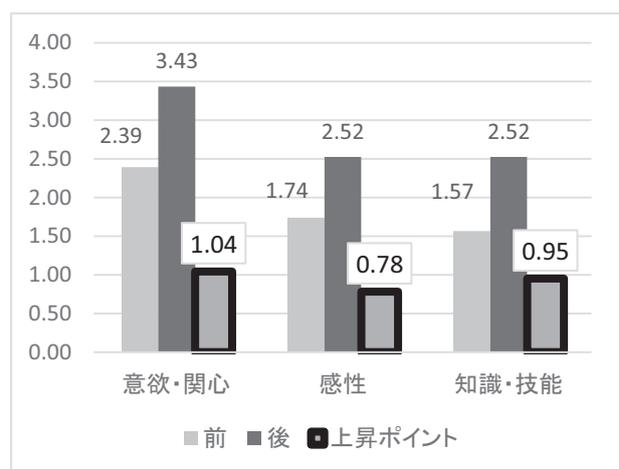


図4 「弾き歌い」に関する自己評価 (単位: 点)

こちらも全ての項目で「後」の値が上昇している。上昇ポイントは「意欲・関心」の値(1.04)が最も大きい。一方、「知識・技能」は「前」の値(1.57)が最も低い

が、上昇倍率を算出すると1.61倍となり、他の2つの項目に比べて自己評価の伸びが最も顕著であったことがわかる（「意欲・関心」は1.44倍、「感性」は1.45倍）。

自由記述でまず目に止まったのは「今までやったことがなかった」「中高の時、伴奏などはしたことがありましたが、弾き歌いは慣れないものでした」等、弾き歌いそのものの経験の少なさであった。しかし、「初めての経験でしたが、やってみるととても楽しかった」「弾き歌いがはじめてだったけど、楽しく学べました」「最初は弾き歌いなんて到底無理だったが、少しずつできるようになってきた」等、未経験だったからこそ進歩への達成感が大きかったことが窺える記述も見られた。

「知識・技能」に係る課題として多く挙げられていたのが、「歌とピアノを同時に行うことの難しさ」についてであった。率直に「ピアノと同時に歌うことは難しい」「ピアノは弾けても歌いだすと急にひけなくなる」という記述や、「ピアノと歌を一緒にやるということは、私自身簡単に考えていたけれど実際はすごく難しかった」のように、意外な気付きとして記されているものもあった。また「弾き歌いをすると、ピアノに集中してしまい声が小さくなってしまふ」「ピアノの音に自分の声が消されて上手くバランスをとれなかった」「ピアノと歌のバランスを学ぶことが出来て良かった」「声とピアノのバランスが大事だとわかりました」等、「歌とピアノの（音量の）バランス」という、弾き歌いの演奏技術にとって重要な、一歩踏み込んだ気付きが見られる記述もあった。

また、「練習の大切さを実感した」という記述が多く見られたことも、本設問の特徴である。「最初は2つのことを同時にするなんて自分には出来ないと思ってたけど、練習していくとできるようになったので練習は大切だと思いました」「歌と自分の演奏を合わせて行うのはとても難しかったが、練習を重ねるうちに出来るようになった」「絶対出来ないと思っていたが、練習するうちに出来る歌が増えていくことが嬉しかった」という記述に加えて、「弾き歌いのイメージが「難しいもの」から「難しいけれど楽しいもの」に変化した」という前向きな記述もあった。

「弾き歌い」は期末試験を含む第10～15回の授業内容に関わる項目であるが、延べ6回に渡って継続的に個人指導を行ったことが、特に「練習（予習復習）の大切さ」の実感、また学習意欲の向上に寄与したものと考えられる。

#### 設問4 鑑賞（他者の表現の受容、理解、認容）

設問4の自己評価の平均は以下、図5の通りである。

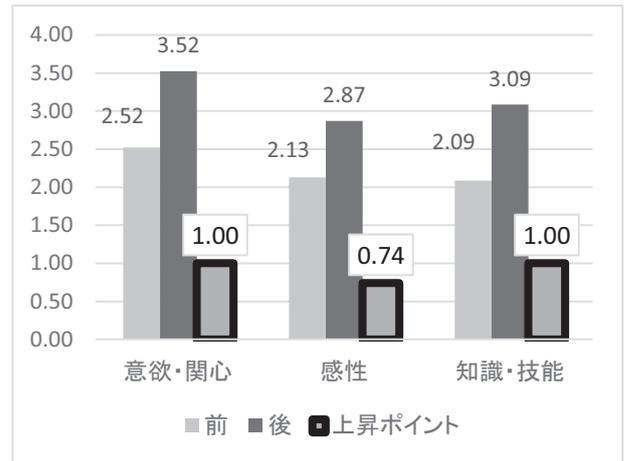


図5 「鑑賞（他者の表現の受容、理解、認容）」に関する自己評価（単位：点）

全ての項目で「後」の値が上昇しているが、特に「意欲・関心」と「知識・技能」については上昇ポイントがいずれも1.00と高い値を示している。

数値で見れば「感性」の上昇ポイントは0.74にとどまっているが、自由記述には学生個々の感性（感受性）の向上を示すものが多く見られた。鍵盤楽器の表現③（第7回）に係るものとしては、「動物をピアノで表す発表では他の友達は何を表したいのか考え感じ取った」「他人の発表を聞く事はとてもおもしろい。第三者目線で見ると新たな発見がある」「みんなの発表などをみて色々な表現の仕方があって聞いてて楽しかったです」等の記述があり、鑑賞の授業（教員コンサート、第8回）に係るものとしては「表現の幅がすごいと思った」「人に伝えるように表現するということが大事だと分かりました」「オペラ聴いてて凄いなと思ったし、引き込まれました。こっちまで楽しかったです」「以前自分が弾いたことのある曲も他者が弾くと違いがたくさんあることに気づくことができた」「ピアノでは心を動かされ、うたでは風景が見えた気がした」のような記述が見られた。

また、「先生方の本気の演奏と歌は引き込まれる何かを感じた。腹式呼吸の勉強にもなった」「学んでいることをふまえて鑑賞すると見方が変わるなと思いました」「ただみるのではなくどこに注目したら良いかなど見方までしっかり学べました」「もともと鑑賞は好きで、授業で学んだこともつなげながら考えると、おもしろかった」「元々鑑賞することは好きでしたが、今では「どうやるのかな？」と演奏・奏者の方にも興味が湧くようになりました」等、本科目において鑑賞の授業を設けたねらいに合致する記述が多く見られ、その教育的効果が示唆された。

設問5 読譜 (楽譜を読むこと)

設問5の自己評価の平均は以下、図6の通りである。

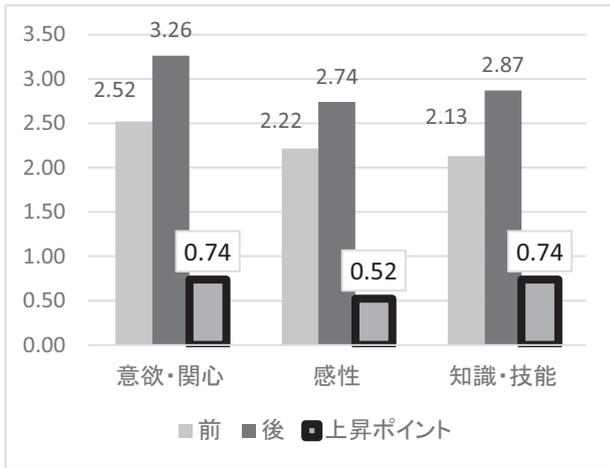


図6 「読譜 (楽譜を読むこと)」に関する自己評価 (単位: 点)

読譜に係る全体指導は、鍵盤楽器の表現② (第6回) におけるクラスター奏法とリズムパターンの例示、及び子どもの歌を味わう① (第10回) の冒頭でしか行っていない。その他の指導は第10~14回にかけての子どもの歌 (弾き歌い) の個人指導の中で、各教員により個別に実施されたのみである。それでも、これまでの設問に比べて値が低いとは言え、全ての項目において上昇が確認できる。

自由記述では「まだ読めないのでこれからがんばる」「楽譜は読めないが、読む努力はした。段々分かるようになってきた」「まだまだ「ド」とか書かないとスラスラ読めないけど丁寧に教えてくれて分かりやすかった」等、前向きに学ぶ意欲が窺える内容が多く見られた。興味深いのは「すぐにはぱっと読めないで、友達に読み方を教えてもらいながら出来ました (筆者注: 「勉強しました」の意と解釈した)」「楽譜を読むことは私はとても苦手です。なので友達に聞いたりしていました」等、読譜が得意な友人にアドバイスをもらいながら勉強した、という記述がいくつか見られたことである。

苦手意識を吐露する記述も少なからず見られたが、特に「左手の譜表 (ヘ音記号) の音名」と「リズム」に関する内容が多くあった (「左手の楽譜を読むのが少し難しかったです」「ヘ音記号の音をもっと読めるになりたい」「付点が付くリズムだと頭がこんがらがる」「リズムを先に読むことが大切」等)。この2点は、今後の読譜指導における全体的な課題として認識すべきである。

設問6 今後の実習や、保育者になった際に役に立つと感じた授業内容

設問6では92名中90名から回答が得られた。テキストマイニングを用いて全ての自由記述の内容を分析し、ワードクラウドに表したものが以下、図7である。

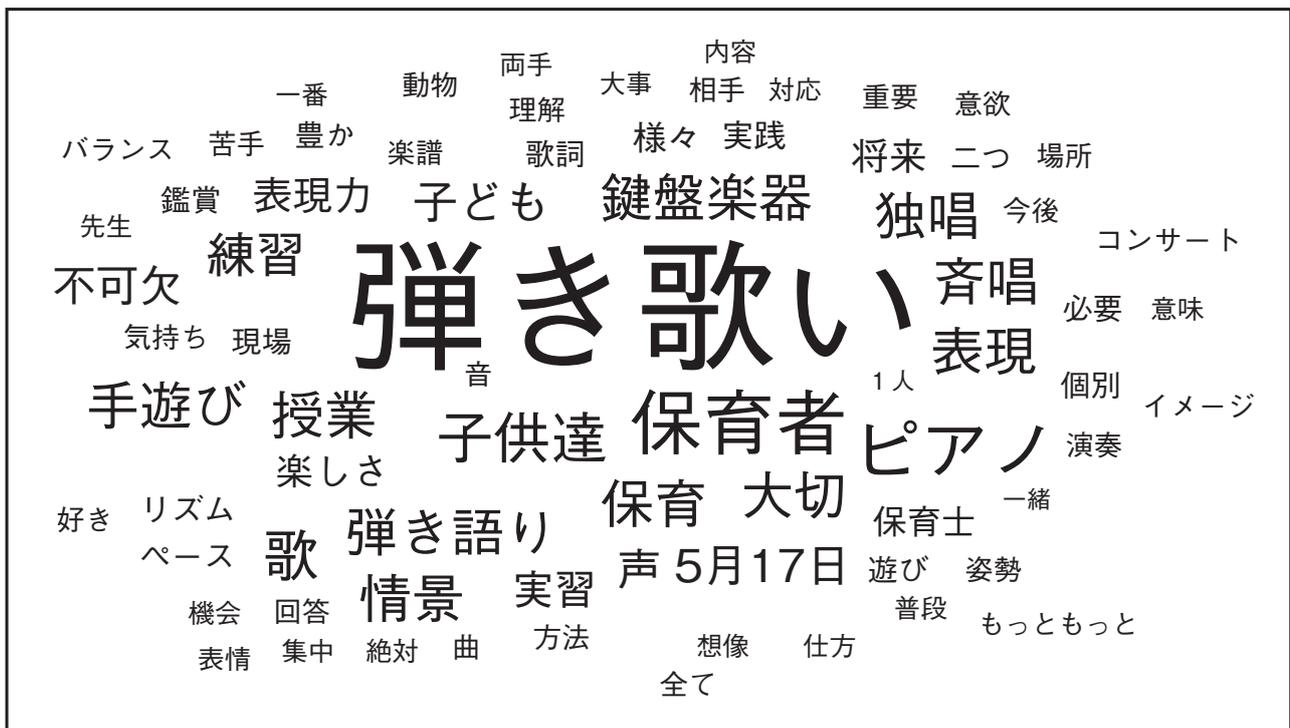


図7 設問6 (自由記述) のワードクラウド<sup>13)</sup>

保育者としての実践という観点において、学生は「弾き歌い」が最も役に立つと感じていることが明らかとなった。「弾き歌い」の周りには、その技術的な基盤となる「鍵盤楽器」「独唱」「ピアノ」があり、また「子供達」「子ども」「表現力」「表現」「斉唱」のように、弾き歌いの実践の場を想起させる語も並んでいる。学生間にはしばしば見られる誤用であるが、「弾き語り」も「弾き歌い」と同義と見なして差し支えないだろう。

自由記述の内容を以下にいくつか引用する。

「弾き歌いは子どもたちが一緒に楽しめるように自分も楽しむ」「歌を通して、子どもたちとコミュニケーションが取れること、表情や声のトーンで気持ちの伝わり方が異なること」「保育者になった際に自分が弾くことでいっぱいにならないように、子どもたちが楽しめるようにピアノを弾くことを心がけて練習したい」「ピアノが弾けても歌えなかったら意味がないので、立ち方や声のだし方を学べて、歌うのは苦手だったけど少し好きになりました」「ピアノをまだ片手だけで弾けるようになったことで卒業までには子供たちと一緒に歌えるようになるんじゃないかなと少し希望が見えた」「現場で弾き歌いをする機会があってミスをしてしまっても、子ども達と楽しみながら歌い続けることを大切にしようと思った」

### 3.2.まとめ

集計データを質問項目別に改めて整理し、授業全体に対する学生の自己評価を俯瞰する。

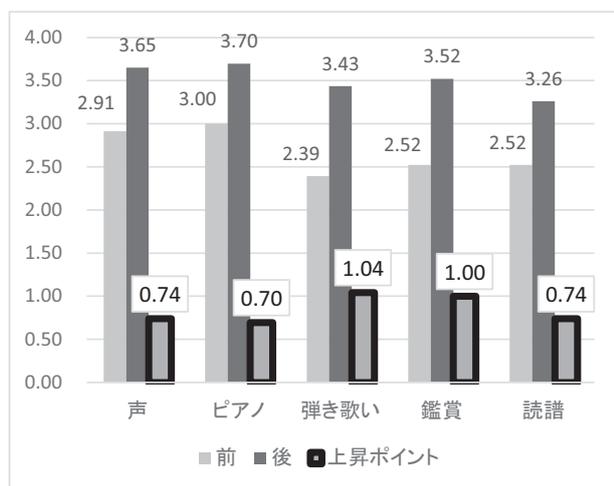


図8 「意欲・関心」に関する自己評価

「意欲・関心」に関する自己評価(図8)は、前後共に「ピアノ」の値が最も高い。新カリ1年目の履修生らも、やはり「ピアノ」を学びたい、もしくは学ばなくてはならない、という意識を強く持って授業に臨んでいた

ことが窺える。一方、「弾き歌い」はほとんどが未経験者ということもあってか、「前」は2.39と最も低い、上昇ポイントは1.04と最も高い。

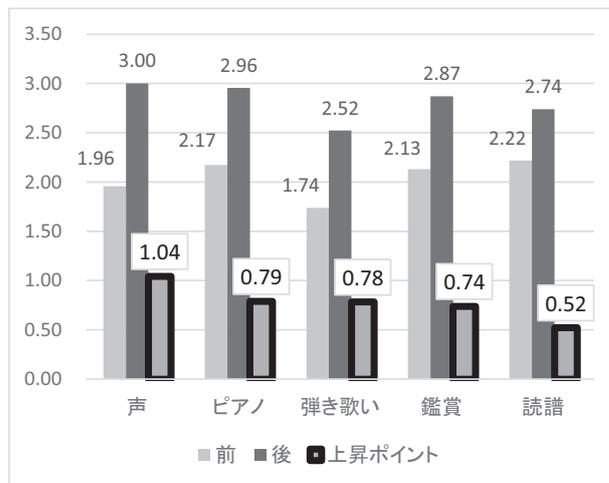


図9 「感性」に関する自己評価

「感性」に関する自己評価(図9)では、「弾き歌い」の「前」が1.74、「後」が2.52と、共に最も低い値を示している。学生はこれまでの経験が最も浅かった授業内容に対して、自己の感性の向上を低く評価している。それに対して「声」は上昇ポイントが1.04と、最も高い値を示している。「ピアノ」に関わらない実技内容であることがその要因であると推測される。「前」の値が最も高いのは「読譜」(2.22)であるが、上昇ポイントは0.52と、最も低い結果となった。

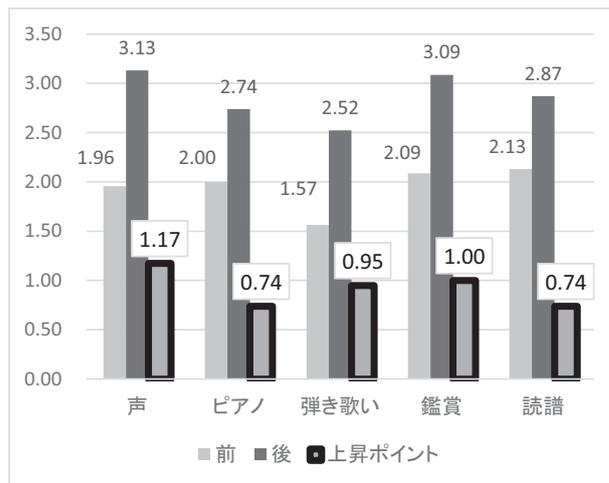


図10 「知識・技能」に関する自己評価

「知識・技能」に関する自己評価(図10)は、それぞれの授業内容によって変化に特徴がある。「声」は上昇ポイントの値が最も高く(1.17)、「後」の値も最も高い

(3.13)。他の授業内容と比較して、特に声の表現に対する自己評価が大いに向上したことがわかる。

上昇ポイントの値は、「ピアノ」「読譜」が共に0.74と最も低い。特に「読譜」は「前」の値が最も高い(2.13)だけに、その上昇の傾向は最も緩やかであったと言える。

「弾き歌い」は「前」(1.57)と「後」(2.52)の値が共に最も低い、上昇倍率を算出するとは最も高く(1.61倍)、自己評価の変化という観点では、全体の中で最も向上していると言える(上昇倍率2位は「声」の1.60倍、最下位は「読譜」の1.35倍である)。

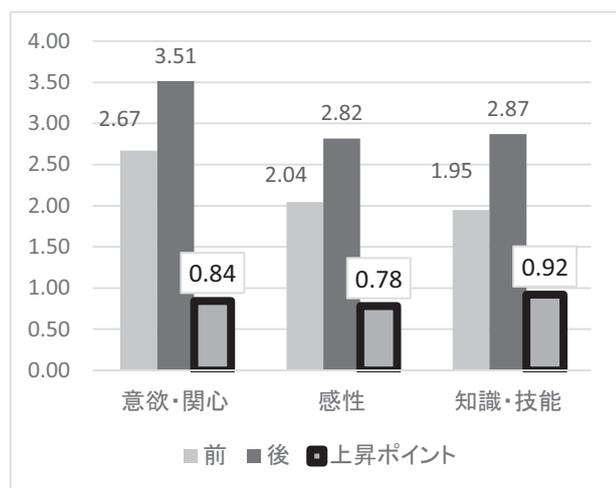


図11 質問項目別自己評価の総平均

質問項目別に全設問のデータをまとめたものが図11である。

「意欲・関心」は「前」(2.67)で最も高く、「後」(3.51)でも最も高い。履修生らは本科目の授業に意欲的に取り組み、授業全体を終えて更に意欲を向上させている。

「感性」は最も抽象的な質問項目にも思われるが、それでも履修生らは全体として自身の「感性」にポジティブな変化を感じている。

「知識・技能」は「前」が最も低く、中間点に満たない1.95という値であるが、上昇ポイントは最も高い(0.92)。授業全体を通して、履修生らは「知識・技能」に関する変化、成長を最も実感している。

#### 4. おわりに

新カリ「音楽と表現Ⅰ」における最も大きな改革は、旧カリ「音楽演習(基礎)」の主要テキストであった『バイエル』から脱却したことである。新旧カリキュラムの異同は、「声楽(基礎)」との統合を含めて、この点を核としている。『バイエル』からの脱却は、保育者養成校としての本学の音楽教育における指導方針、指導内容の

大転換に他ならない。新カリが見据えるのは、あくまでも保育者としての音楽表現技術の習得であり、その基盤となるのはピアノ(独奏)の演奏技術ではなく、音楽表現そのものの奥深さを知ること、またその奥深さを知するための様々なアプローチを通して、音楽を表現する喜びを実感することであると考えている。その意味では、今回のアンケート調査を通して、特に保育における「弾き歌い」の大切さや意義に気づき、その習得の喜びを実感しながら更なる学びに向かおうとする意欲が学生全体の中に垣間見えたことは大きな収穫であった。これは大人数での歌唱のみの指導と、ピアノ(独奏)の演奏技術指導に専念していた旧カリの初年次春学期には望むべくもない姿であった。

いずれにせよ「音楽と表現Ⅰ」のねらいは、学生自身の学びの「畑を耕す」ことにその重きを置いていたのであり、この授業実践の真の成果については、今後の音楽関連科目において「種を蒔く」プロセスを経た上で、改めて検証する必要があるだろう。

#### 引用文献

- 葛西健治・伊藤仁美・今川典子・多賀洋子・嶋田陽子・眞田千絵・林英美子(2016)、「保育者養成における音楽授業科目に関する一考察(2):本学の1年次秋学期から2年次春学期までの器楽関連科目について」、『こども教育宝仙大学紀要』7、13-24。
- 葛西健治・伊藤仁美・今川典子・多賀洋子・嶋田陽子・眞田千絵(2017)、「保育者養成における音楽授業科目に関する一考察(3):本学の音楽教育カリキュラムの総括と今後の課題」、『こども教育宝仙大学紀要』8、23-35。

#### 参考文献

- 伊藤仁美・葛西健治・多賀洋子・今川典子・嶋田陽子(2015)、「保育者養成における音楽授業科目に関する一考察(1):本学の初年次音楽教育カリキュラムの比較を通して」、『こども教育宝仙大学紀要』6、1-10。
- 長崎結美(2018)、「乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性(3):保育者養成の視点から」、『帯広大谷短期大学紀要』55、35-43。

#### 注

- 1) 本学の旧カリにおける音楽関連科目一覧については、葛西ほか(2017: 33表6)を参照。
- 2) 「表現シリーズ」は本学における表現教育の重点化を担保するものとして構想されたものである。ここに含まれる4科目は科目区分、単位数共に共通である。
- 3) 本学には「ピアノレッスン室」という名称の教場が4つある。それぞれの部屋にはアップライトピアノが1台ずつ設置されており、教員はこれを用いて順次学生の個人

指導を行う。学生には1人につき1台ずつクラビノーバが割り当てられており、個人指導時以外は各自がヘッドホンを着用して練習に集中することができる（クラビノーバはピアノレッスン室1と4に各8台、同2と3に各10台、延べ36台設置されている）。

- 4) 「音楽演習室」は収容人数36名の教場で、グランドピアノが1台、アップライトピアノが1台設置されている。床はフラットで固定のテーブルやイスはない。講義の際には小机付きのパイプイスを人数分並べて対応している。
- 5) 成人男性の声域は成人女性に比べて約1オクターヴ低い。また子どもの歌を歌唱する際の発声法についても、成人女性は自然な流れの中でファルセット(裏声、頭声)を用いるのに対し、成人男性は原則として地声を用いる(胸声を基礎とする)ことが通常である。例えば女子学生を指導する際に男性教員が模範唱をすると、その女子学生は男性教員と同じ声域(本来の女性の声域から1オクターヴ低い声(地声))でその歌唱をまねしてしまう、という例を筆者(葛西)は何度か経験している。
- 6) 葛西ほか(2016: 20 図1) 参照。
- 7) 鑑賞レポート(A4用紙縦書き1枚)では5つの項目(1. これまでの授業を踏まえて「気付いたこと、感じたこと、考えたこと」 2. これからの「音楽と表現」の学びに生かしたいこと 3. 人間にとって「歌を歌う」とは? 「ピアノを弾く」とは? 4. 保育者にとって「歌を歌う」とは? 「ピアノを弾く」とは? 5. その他にも「気付いたこと、感じたこと、考えたこと」)を提示し、自由記述を求めた。なお用紙の配布は鑑賞の授業終了直後に行った。
- 8) 当該授業時間帯のみ事務職員1名に授業補助を依頼し、教員は演奏に専念した。
- 9) 教場の制約上、演奏に用いたのはアップライトピアノ1台である。衣装は一般的なクラシックのコンサートに準じて女性教員はドレス、男性教員はタキシードを着用した。
- 10) 筆者(葛西)の検討に基づいて、子どもの歌の使用楽譜はいずれも『明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌 一唱歌童謡140年のあゆみ』全国大学音楽教育学会 編(音楽之友社、2013)に拠った。
- 11) 旧カリでは子どもの歌の指導方針を各教員の裁量に委ねていたため、教員によって少なからず差が生じ、学生の習得状況(進度)に影響が及ぶ場合があった。
- 12) 初回授業の調査によると、履修生(学期途中で休学した1名を除く)92名中、ピアノ未経験者は45名(48.9%)だった。
- 13) User Local社が提供する「AIテキストマイニング」を使用した(<https://textmining.userlocal.jp/> 2019年11月4日アクセス)。なお、作成に当たっては、本稿への適用性を確保するため「弾き歌い」「ピアノ」「声」の3

語を固有名詞設定し、品詞を「名詞」のみにフィルタリングした。図示された単語の大きさは出現頻度の高さを表す。